

秋 吉 台 山

阿 山 勇 祐

「センセーイ」「センセー」と声が高原にひびく、良く晴れた遠足日和である。楽しみの一つである弁当を食べ終った頃である。どの先生に言っているのかわからないのでキョロ、キョロするには及ばない、雄大な丘、丘を見ていた、するとどうやら呼び声は私の方へ近寄って来る様である。見るとこれは大変、8つ切の画紙をヒラヒラさせながら2人の大型学生が馳せて来る、これに呼応した様に2人の学生の姿も見える。

私はやれやれと思った、先月美術部の部会で秋吉台の歓迎遠足には、秋吉台の山や石灰岩をスケッチしようと言う。私は遠足で秋吉台山には再度行った、スケッチブックも持って行ったが描いたことがない。理由、うん、面白くないからさ、変化の無い円い山々、無造作に露出した岩頭で整理がつかない、石灰岩は溶けるから庭石にもならないだろう、と言えば学生達はよく見ている、掘り出した石は燈籠に化けていますよ。描いたことあるかと聞けば、昔から描きたいと思っていたと答える。伊佐あたりの出身だったと思う、そんなことを追想するうちに学生達は私を取り囲んだ。「先生、描きましたか」「どう描いたらよいか説明して下さいよう」「早く、描く時間がなくなりますわよ」こちらの言うことを先にしゃべられた気がする。「うん、描くとしよう、近くの円い丘、遠方の円い山、観光道路が真中にドン、遠方の石がトントン、もう1列トントコトン、近くの石がドシン、ドシン、その間に合の手がトントコトン、その頃になると学生達への説明でなく私自身が面白い。もう1枚は罫兎に描いてみせる気で、円いお山がドッシリコ、小さなお石がトントコトン、口まかせに手を動かせば心もうきりきして来た、学生達もトントコトンとリズムに乗っている。

それ以来毎月1回秋吉台山に行くことにした、千円あると往復のバス代と弁当代があった、今では3千円がかつがつかである。初めの1年間は月の遷り変りを知るために行った、2年目からは必要に応じて四季折々に行っている。

4 月

1年中を見通して一番よるしい、ほどよく若草が伸び、それぞれの草は、青味の緑、黄味系の緑等みどりの段階が面白い、新鮮さと活気がみられる。露出する石灰岩も白、灰色、青味灰、黄土味灰等がある、雲の有無厚薄によって変化する。人々は秋吉台山の石灰岩は1日七度変化するとは言わない、人間とのかかわり合いが今まで少なかったのかも知れない。

オキナ草は下向き加減の花で、内側の紅紫色が情緒的である、誰もが心ひかれる花である。

ミツバチチグリの黄色も鮮烈で緑の葉に映える。スマレと言っても濃い紫から、薄赤味まで非常に幅が広い、これ等は混り合い孤立して生々としている。石灰岩は雨に洗われ一部は白く輝きその下辺に散乱する片々は、オカトラノオ、コマツナギなどの若葉の緑とホタルカズラの青紫の可憐な花に覆われ爽快である。ワラビはアスファルトの散歩道付近には少ない、人通りの少ない方へ行き一步はいると僅かな時間で、大きく柔らかいのが一握り二握りはすぐ取れる。

秋吉台は南北20km、東西8kmと言われる。展望台は南側にあつて北方に広がる台地がほうほうとしている。画くにはただ緑、円い丘の稜線がはいり、白い岩と空がはいり単純である。8F位に大きいタッチで描き、点景人物や馬など入れると変わったものになる。

5 月

草が伸びて緑が少し濃くなってくる、4月を女性的とみれば5月は男性的と言えよう。5万分の1の地図を見ると海拔200mより300mで、頂上が370mより400mの起伏のゆるやかな大高原である。南側つまり秋芳洞よりに団体バス停がありその北側に貸馬と馬車がある。貸馬は親子2人で相乗りし若いカップルは2頭の馬に乗り前後してポッカリ、ポッカリ進んでいる。その昔満蒙開拓義勇軍の訓練所で馬に乗った、馬は5、6歩、歩くと土手の草を喰って20m先の交替の場所になかなか行き着かなくて困ったことがあった。秋吉台ではおじさんが引っぱってくれるので心配はないが見る方が楽しい。緑一色の中に白味の石灰岩その傍に赤い服黄色の帽子紫色がうごめくのも人間味を感じる。馬車は5、6名乗ると発車する。おじさんは秋吉台の説明をし良い声で歌を披露すると風のまにまに高低強弱の音が流れる、貸馬及び馬車は北方にある若竹山までの1.5km位の往復で、秋吉台山の風物詩である。

私はスケッチに行くとそこら当りを歩いて見る。地形を見、そのふんい気になれるためである。先ず岩の重なりを探す、そのうちに丘の起伏に目移って来る、すると大地全体がうねりを感じさせる、丘と草原との関係などトントコトンの余裕はなくなってしまう、で、スケールの大きさなど考えると10F位なら適当である。画架を持ったところで大した荷にもならない、全体緑々しているので赤土だの家だの入れて描いた。100Fとなると緊張して、りきむだけはいけない、トントコトンみたいな遊びも必要である。

6 月

雨の日にわざわざ出かけた、天気との比較である、雨の日の趣も知っておきたい。

秋芳洞へ下車すると師範学校の同期生Mがいた。私の顔を見ると、この雨降りに秋芳洞か、馬鹿たれ。よく話を聞くと大雨の後しばらくすると洞の中が増水し、足許も水がかかりすべり易くなり危険が伴うので入洞しない方がよいとのことである。青葉の頃雨でしっとりした林などの風情は又格別である。己れは台山のみどりを見に来たんだと説明すればわかったと言っ

た、Mは忽然と現われ、忽然と消え去った、秋芳洞の神様が彼にお告げを伝えさせた様にも思える。洞内の水の変化をシュールリアリズム的に構成しても面白い。又幼児の稚拙味を借用して描くのも一興だと思った。洞の入口の宵の明星、千枚皿、団体客に照明を当てる、こうもり、目なし魚、そして台上より水のしみ込む状態と洞内の驚愕と歓喜を絵巻物にしてもよい。

7 月

この頃になると秋吉台山行きのスケッチ道具が自らととのってきた。水、二つ折洋傘、5万分の1の地図、スケッチブック、色鉛筆24色、鉛筆6Hより6Bとコンテ等はズックのかばんに入れてある。それに弁当、果物、水筒用意すれば何時でも出発出来る、日が短くなれば懐中電燈、時に水彩用にペリカンを入れる、道具のそろったところで半世紀前を回顧してみたい。

当時短期現役で入隊し秋吉台山で演習をした。太田の廠舎を出発して南へ4kmも下がり突撃演習である。前面の丘に敵兵あり、突撃命令でこの丘に馳せ上る。敵は後方の丘へ逃げた、更に猛追撃せよ、すると敵は抵抗せず後方の丘へ又逃げる。廠舎を横目で見ながら更に北に向って進む、そうすると汗と疲労で時間の経過はよくわからない、すると我が軍の果敢な追撃により敵は蜘蛛の子を散らす様に逃げた。演習終了。

一寸と一服の時は岩かげの、ナワシロイチゴを口に入れると甘ずっぱい、つばきが出て一瞬しのげる。夏の軍服でも厚いので背中汗はサーと流れて涼を感じる。台山演習に就ての話、今で言うオリエンテーションである。直径1m位の穴がスポッと開いているそのそばに連れて行かれた、子供の頭大の石をその中に投げ込むとカラカラと音はしだいに小さくなる、深い穴である。その穴の周りには杭を打って針金で囲いがしてある。夜間演習の時の危険防止のためである、ほふく前進中頭より落ちたら全巻の終りである。もう一つ斥候の話を書こう、斥候に出て歩くうちに台山を下って反対側の農家に出る。帰らなきとわめいても、さわいでも駄目、星を目当てに帰ると言っても本隊はどこにいるのかわからない、結局一泊して涼しい顔をして帰る、そして情況報告して一段落である。

以上の様なことで絵を描こうなど思ったこともない、絵を描く仲間が4人位いたが描こうかと言う話もしたことがなかった。今日は描く気で6F4枚持って来た。はじめの2枚は油を使ったが後の2枚は絵具を多めに付けて一気に描き上げた。コーモリ傘は日かげ用である、台の稜に出ると風が強いので一歩後に座ると傘も安定して涼しい、仕事もはかどる。

8 月

茅などいよいよ丈が伸びて、大きい石灰岩でも岩頭が見えるくらいである、緑色の葉も青味を通り黒味を帯びて来る。小さい部分も眺めるとオカノトラノオ、ヒメヒオギスイセン等も見

られて、かかるところに花もあるかなと言う感じである。

空を見上げると、北半は雲がぎっしりあるが南天は青空である、又その反対の場合もある。何でそうなるのか深く追究してない、私の推理によれば、中国山脈の分水嶺だから上昇気流によるものだと思う。

何時でも秋吉台山の土はしめっている、雨が降れば吸い込まれてゆき水を含むことは少いと思う、これも私案になるが、夜中にグッと気温が下がり空気中の水分がしめり気を与えるに違いない。ここより少し南に伊佐がある、霧が深いという、茶が名物である。

私は貸馬及び馬車の発着地点に立っている。西側にウバーレの凹地をはさんで向いが妙見山である、ここには広い自動車置場がある、北方に自動車道路がつづいている。妙見山の東の肩に折りたたみの椅子を出して腰をすえて足もとのあたりを見ると、十円、百円などがころんでいる、さっそく拾い上げた、台山での拾いものはこのくらいである。いや、カラスの羽毛を度々拾っている。下関の火の山のカラスの羽毛も持っている。孫は不思議な黒いものにさわって頬やあごの下などコチョコ、コチョコをする、何も教えないのに子供なみに考えているんだなーと思う、この孫が色々な事を教えてくれる。又考えさせてくれる。例えばキリン作ってと云う、四つ切りの画紙を全部使って作るにはどう切れば良いか、傍で早く早くとせきたてる。うん、今作る、と返事をしながら作り方と順序を考える、そして鋏をバッサリ入れると豪快な切れ味もわかる、マチスの切紙もこの切り味だなと思う、私の「1枚の紙から」がはじまった。

9 月

台山に登ってギクッとした、秋の気配でなく、秋である。秋吉台山は一変して枯野である。関東地方で薩摩芋の葉が霜でゴロリとやられたのを見た以上の驚きであった。この様に早い秋吉である、ここまで書いて秋吉の地名の起りがわかった様である。台山又はこの一帯秋が吉い、昔から人間が住んで米の収穫の良さとも考えよう。昔より栗があったので一層栗林を多くしたとも考えられる、秋吉台の北東に大正洞があるこの付近に、猪出台と言う地名がある。その昔猪以外にも多数取れたと思われる、博物館には出土の動物の骨を陳列している。文献とは全く関係なく秋吉は食うものに困らない秋吉と考えたい。くどいが、秋が吉ければ冬は越せる。

緑が黄色に変わった、山の形は変わっていないが何となく落ちつけない。スケッチブックに線を引いたり、あたりの草をキョロ、キョロ見たりして心の落ちつきを計った、来る途中でも緑、緑と思ったのが予想もしなかった黄色に変化した所に問題があった様である。10月末に来たのであれば黄色に変わっていても当然だと思う、時間の進行と場所の高さが問題なのだろう。

層積雲がとび交う様子は劇的である、雲の移動により白い岩がグッと出たり、近くの丘が雲のかけ、遠い山は日当り、空は暗い等手早く小さいスケッチをするうちに一段と落ちつきを取

りもどした。

下関の唐戸を出発して1時間余りの所に、U字どころかV字型の上りの急カーブがある。曲ったとたんに、スケッチ箱は私の頭の上をとんで、通路の向う側の乗客の腰にくらいついた。近頃、直線に改められ下関―秋芳洞間は更に時間の短縮を見るに至った。

秋吉台山に話を返そう、近所の小学校は遠足をかねて葉草センブリを採集しそれを売却して運動会の費用にした。遊びながらもうけ、もうけながら遊ぶ、楽しさ一杯である、これは半世紀も前に聞いた話である。

この日は、あちらこちらと歩き廻ったが、中でも逆光線の風景が印象的で10F、12Fの手製キャンパスに描いた。キャンパスは米を入れる亜麻袋を枠に手で張る、この位の余裕があった方がよい、天気の良い時、ニカワを下地に塗って天日に当てるとピンと張る、その上に亜鉛華をニカワ液にとかして塗り再び天日に当てたものである。もっと手をはぶくために、唐米袋をキャンパス張り器で強く張り、地塗りの白を直接ペインティングナイフで塗りつけた、荒目の効果は十分楽しめる。キトンを着た女、白壁等に多く使用した。

10 月

マルバ萩、キキョウ、オミナエシ等と枯草は石灰岩を埋めて、雨に打ちひしゃがれている。この時は月2回行った、枯野とオトコエシが太陽に輝く様子、曇天に打沈む枯野、野分が風情を添えた荒削りの味も又格別である。再び小さな一角にリンドウ、ツリガネニンジン、サワヒヨドリなど岩によりそった形もおくゆかしい。

レモンイエロー、カドミウムライト、ネーブルス等各社のものを多量に入れたのもこの時である。

11 月

冷たい風、その風当りを見定めて岩かげに身をひそめる。ジャケットなど1枚着こむが、キャラバン靴を使用すると足もとが暖かく、スケッチを楽しくする。スケッチをしていると、いやに大きい羽音がする、ふり返って見ると雄雉が一羽飛び立って行った、予想外の鳥がいた。秋吉台山のカラスの群は名物の一つに違いない、草より石灰岩の頭が出て、その上にカラスの群がとまり、黒い一団は、点より線となって流れて行き、ハタと岩頭にとまる。8mmあたりのネタには面白いと思う。大小の石灰岩頭に糞をたれ流している、これも一つの変化だと思う。岩とカラス、黄色の雑草と雲の流れそれにカラス、青空に黒の集団の群れ等絵になる。

ゴミ捨て場はカラスの餌場となるので、管理人が常に巡って焼却している。一面が長方形で四角な金網である、常に燃しているので金網は真黒、あたりと比較して黒い焼け残りは無惨である、そんなそばに、ヤマジノギクなどがあると救われるのに。

12 月

雪降りを前月よりねらっているが思う様に雪降りは無い。某日、下関が雪降りだから思い切って出かけた。バスは海岸より山手にはいると雪が深くなる、美祢市あたりは、根雪の感じがつよい、秋芳洞は中央バス停だけあって雪はすっかり取り除かれてあった、台山に登ると全面雪である。北側の斜面には白い雪がずっしりとある、茅はシベリア下ろしに吹かれて茎だけが林立していた、おや、丹沢山の尾根ではないかと錯覚をおこした程だった。葉の無い茅の一むらは微風に戯れていた。雪の上にゴロリと横になった赤いオーバーの女がいた、しばらくすると立上って帰って行った、透明人間の映画の様にくぼみだけが残っている。厳冬ではあるが茅の一部が太陽に輝き暖い感じさえあった、口に雪をふくんでみる、冷たさが残るが秋吉台特有の味と香りはなかった、溶けて流れりゃみなおなじである、秋吉台上の太陽に照らされての冷たさ、この感触は此処だけの感激である。

この時8F2枚持って来た、雪の白と、岩の灰色、枯草の黄土、空のやや青味等処理がしやすかった。

16時20分最終の下山バスで降りる、下関行の普通便は17時、帰りの時間はこの便にきめている。台山に来るアルバイトのおばさん達、秋芳洞付近の店番などのおばさん、ねえさん達もこの最終便に乗り込む、管理人も乗った、手に短い花柄に小さな五弁の花の株を持っている、顔見知りのおばさん達に、「これは梅鉢草なんだ」「秋吉台にいて未だ知らないのか」あと笑い声はずんでいる。

1 月

降雪をねらって再び出かけた、この時南側の雪は少なく、北側の斜面はかつがつであった、台山の雪は早く溶けると誰かが言っていた。

絵を描くには風が無く案外とよかった。

切符売のおじさんは珍らしく会社の制服にカバンをかけている。新年でもあるし挨拶をした。有名な絵描きさんが時々来られると言うことですがあなたですか、私は下関です、人違いでしょう、それは遠方から・・・と、更に続けてこの様な雪降りには、雪見酒を持って来ますよ。なるほど、風流とはこんなことを言うのだろう、短歌か俳句の連中だろうか、旦那衆だろうか、雪降りでは野良仕事にもならない、ひとつ鋭気でも養うか、と云うことも考えられる、これも一種の風雅かな。

古川柳に、雪の供こいつが何の酒落だろう。

2 月

冬晴れの好天である、冬期は冬期なみに観光客は来ている。バスを降りた観光客は、ほんのちょっと歩くと、岩の上に腰をかけニコリ笑ってカメラにおさまると、すぐバスにもぐり込んでしまう。

私は1年近くも来ているので、おらんちの山、と云う顔になる、歳月は人の顔をつくると言うが全くそうである、他人の山だが、僕んちの山という実感が湧いてくる。ほんの一寸の時間で秋吉台山に満足した顔を、我がことの様に考えると、おかしく浅ましい気がする。

私は某年10月上旬十和田湖へ行った、紅葉は美しいが寒い、私も一寸見て満足した顔をしたに違いない、だれも同じ様なことをするものだな、と思った。

良かったら改めて、そのものだけを見に行けばよい、学術的な探究もできるというものである。

暖い部屋で窓外風景も一興だろうと国民宿舎、若竹荘へ2時間ばかり立ち寄った。思った程、部屋は暖くなく、窓外風景もつれない思いだった。

帰りのバスの中で管理人に会った、捨て場の見巡りも寒くて大変ですねと話すうちにドリイネの穴に落ち込んだ話になった。

高校生1人は危険区域の穴の入口でトンと跳んだはずみに足から吸い込まれて一瞬いなくなった。1人の生徒は先生に、先生は事務所に、連絡がはじまり、不安と不吉の時間がはじまった。救護員の務め先にそれぞれ連絡し、勿論、医者にも連絡する、救護員は各々家へ帰り身仕度をし、80m降りる縄ばしごを持って来た、秋芳洞は更に20mも下に横たわっている。待つ方は救助活動が遅いと言ったそうである、そんな話を聞いて私は、うーん、と言った。足から滑べったので九死に一生、助かった、奇蹟である。

3 月

昔は第1日曜日に山焼きを行った、まわりの消防団員を総動員する、そして1日かかるのが普通の様である。

成年、乾燥して一寸風のある時、8時頃点火して午前中に終わったこともある。

今頃は2月の終りに変更された、降雨で順次延期すると4月の緑に関係があるという、俳句をつくる本学のA教授は、山焼きを見に行った様子を面白く説明してくれた、山焼きの俳句の代りに次の句を示された、阿武川下りにて読める。

「げんげ野や昔は曳きし高瀬舟」

君も行って見給え、山焼きは絵にならないかね、友人も山焼きの後、山肌は黒く石灰岩は白く、いいものですよと言った。煙がもくもく出て人が動きまわるだけでは8mm向けではないか

と思う、記録画であれば煙の出る現場が良いと思う、4年間は山焼きの翌日描きに行った。すすけた岩肌、パンとはじけた石灰岩の新鮮な岩肌、草は燃えて黒いが茅の株など半分こげ、萩などは梢が焼けて黒い幹がそのまま残っている、そのため冬枯れを描くには良いモチーフである。はじめは色鉛筆とスケッチブックで歩き廻った、やれやれ疲れたと独り言をいいながらベンチに座った、服はと見れば灰が付き、燃え残りのすみがつきさんざんであった。

すすけた岩は雨にうたれ、4月の緑に対応しなければいけない、そんな因果関係がチラリと浮んだ。

萌え出る草は名もなき・・・で春らしい、では文にならないと注意せられたKは、日本アルプスに登るのに草や鳥の姿やなき声を研究したと私に話した。台山にある博物館で植物、動物、造山活動など一まとめにした冊子を買った。もう一つの小冊子を紹介しよう、大正洞の先に景清洞がある、ここでは「秋吉いろいろ話」を出している、なかにはNHKで放送した一こまもあると。

100F 5～6枚は、7～8年描いた、毎年同じ場所にスケッチに行く、感激があらたまるところで手を入れる、これが又楽しい。学生達が描こうと言った時は嫌だと言ったが、今ではヒラヒラ、トントコトンの話を人々に話している、きっかけをつくってくれた学生諸君に感謝の意を表しよう。